

『おばけずきのいはれ少々と處女作』

泉鏡花作

明治四十年五月

全一章

僕は随分な迷信家だ。何れそれには親ゆづりといつたやうなことがあるのは云ふ迄もない。父が熱心な信心家であつたことも其一つの原因であらう。僕の幼時には物見遊山に行くといふことよりも、お寺詣りに連れられる方が多かつた。

僕は明かに世に一二つの大なる超自然力のあることを信ずる。これを強ひて一纏めに命名すると、一を觀音力、他を鬼神力とでも呼ばうか、共に人間はこれに對して到底不可抗力のものである。

鬼神力が具體的に吾人の前に現顯する時は、三つ目小僧ともなり、大入道ともなり、一本脚傘の化物ともなる。世に所謂妖怪變化の類は、すべてこれ鬼神力の具體的現前に外ならぬ。

鬼神力が三つ目小僧となり、大入道となるやうに、亦觀音力の微妙なる影向のあるを見ることを疑はぬ。僕は人の手に作られた石の地藏に、かしこくも自在の力ましますし、觀世音に無量無邊の福德ましますて、其功力測るべからずと信ずるのである。乃至一草一木の裡、或は鬼神力宿り、或は觀音力宿る。必ずしも白蓮に觀音立ち給ひ、必ずしも紫陽花に鬼神隱るといふではない。我が心の照應する所境によつて變幻極りない。僕が御幣を擔ぎ、其を信ずるものは實にこの故である。

僕は一方鬼神力に對しては大なる畏れを有つて居る。けれども又一方觀音力の絶大なる加護を信ずる。この故に念々頭々彼の觀音力を念ずる時んば、假令ば如何なる形に於て鬼神力の現前することがあるとも、それに向つて遂に何等の畏れも抱くことがない。されば自分に取つては最も畏るべき鬼神力も、又或る時は最も親むべき友たることが少くない。

さらば僕は如何に觀音力を念じ、如何に觀音の加護を信ずるかといふに、由來が執拗なる迷信に執へ

られた僕であれば固より或は玄妙なる哲學的見地に立つて、そこに立命の基礎を作り、又或は深奥なる宗教的見地に居つて、そこに安心の臍を定めるといふ世に所謂學者、宗教家達とは自ら其信仰状態を異にする氣の毒さはいふ迄もない。

僕はかの觀音經を讀誦するに、「彼の觀音力を念ずれば」といふ訓讀法を用ゐないで、「念彼觀音力」といふ音讀法を用ゐる。蓋し僕には觀音經の文句

—— なほ一層適切に云へば文句の調子 ——

其ものが難有いのであつて、その現してある文句が何事を意味しようとも、そんな事には少しも關係を有たぬのである。この故に觀音經を誦するも敢て箇中の眞意を闡明しようといふやうなことは、未だ嘗て考へ企てたことがない。否な僕は斯くの如き妙法に向つて、斯くの如く考へ斯くの如く企つべきものでないと思つて居る。僕は唯かの自ら敬虔の情を禁じ能はざるが如き、微妙なる音調を尚しとするものである。

そこで文章の死活が又屢々音調の巧拙に支配せら

るゝ事の少からざるを思ふに、文章の生命は慥かに
其半以上懸つて音調（ふし）があると云ふ意味では
ない。の上にあることを信ずるのである。故に三
下りの三味線で二上りを唄ふやうな調子はづれの文
章は、既に文章たる價値の一半を失つたものと斷言
することを得。但し野良調子を張上げて田園がつた
り、お座敷へ出て失禮な裸踊りをするやうなのは調
子に合つても話が違ふ。ですから僕は水には音あり、
樹には聲ある文章を書きたいとかせいで居る。

話は少しく岐路に入つた、今再び立ち戻つて笑は
るべき僕が迷信の一例を語らねばならぬ。僕が横寺
町の先生の宅にゐた頃、「讀賣に載すべき先生の原
稿を、角の酒屋のポストに投入するのが日課だつた
ことがある。原稿が一度なくなると復容易に稿を更
め難いことは、我も人も熟知して居る所である。
この大切な品がどんな手落で、遺失粗相などがある
まいものでもない」と云ふ迷信を生じた。先づ先生か
ら受取つた原稿は、これを大事と肌につけて例のポ
ストにやつて行く。我が手は原稿と共にポストの投
入口に奥深く挿入せられて暫くに原稿を離れ得ない。

やがて漸く稿を離れて封筒はポストの底に落ちる。けれどそれだけでは安心が出来ない。若しか原稿はポストの周囲にでも落ちてゐないだらうかといふ危懼は、直ちに次いで我を襲ふのである。さうしてどうしても三回、必ずポストを周つて見る。それが夜でもあればだが、眞晝中狂氣染た眞似をするのであるから、流石に世間が憚られる、人の見ぬ間を速疾くと思ふので其氣苦勞は一方ならなかつた。かくて兎も角にポストの三めぐりが済むとなほ今一度と慥める爲に、ポストの方を振り返つて見る。即ちこれ程の手数を経なければ、自分は到底安心するこゝとが出来なかつたのである。

然るに或る時この醜態を先生に發見せられ、一喝「お前はなぜそんな見苦しい事をする。」と怒鳴られたので、原稿投函上の迷信は一時に消失してしまつた。蓋し自分が絶対の信用を捧ぐる先生の一喝は、この場合なほ觀音力の現前せるに外ならぬのである。これによつて僕は宗教の感化力が其教義の如何よりも、布教者の人格如何に關することの多いといふ實際を感じ得た。

僕が迷信の探淵に陥つてゐた時代は、今から想うても慄然とするくらゐ、心身共にこれが為に縛られて仕舞ひ、一日一刻として安かなることはなかつた。眠らうとするに、魔は我が胸に重りして夢は千々に碎かれる。座を起たうとするに、足或は蟲を蹈むやうなことはありはせぬかと、流石殺生の罪が恐しくなる。こんな有様で、晝夜を分たず、碌々寝ることもなければ、起きるといふでもなく、我在りと自覺するに頗る朦朧の状態にあつた。

丁度この時分、父の訃に接して田舎に歸つたが、家計が困難で米鹽の料は盡きる。爲に屢々自殺の意を生じて、果ては家に近き百間堀といふ池に身を投げようとさへ決心したことがあつた。而かも斯くの如きは唯これ困窮の餘に出でたことで、他に何等の煩悶があつてもない。この煩悶の裡に「鐘聲夜半録」は成つた。

稿の成ると共に直ちにこれを東京に郵送して先生の校閲を願つたが、先生は一讀して直ちに僕が常時の心状を看破せられた。返事は打返し届いて、お前

の筆端には自殺を樂むやうな精神が仄見える。家計の困難を悲むやうなら、なぜ富貴の家には生れ來ぬぞ
其時先生が送られた手紙の文句はなほ
記憶にある

其の膽の小なる芥子の如く其の心の弱きこと芋殻の如し、さほどに貧苦が苦しくば、安ぞ其始め彫錦帳の中に生れ來らざりし。破壁殘軒の下に生を享けてパンを咬み水を飲む身も天ならずや。

馬鹿め、しつかり修行しろ、といふのであつた。これも亦信じて居る先生の言葉であつたから、心機立ちどころに一轉することが出來た。今日と雖も想うて常時の事に到る毎に、心自ら寒からざるを得ない。

迷信譚は之で止めて、處女作に移らう。

此「鐘聲夜半録」は明治二十七年恰も日清戦争の始まらうといふ際に成つたのであるが、當時に於ける文士生活の困難を思ふにつけ、日露開戦の當初に

も亦或は同じ困難に陥りはせぬかといふ危惧からして、當時の事を覚えてゐる文學者仲間には少からぬ恐慌を惹き起し、額を鳩めたものもなきにしもあらずであつたらう。

二十七八年戰爭當時は實に文學者の飢饉歳であつた。未だ文藝俱樂部は出来ない時分で、原稿を持つて行つて買つて貰はうといふに所はなく、新聞は戰爭に逐はれて文學などを載せる餘裕はない。所謂文壇餓殍ありで、惨憺極る有様であつたが、この時に當つて春陽堂は鐵道小説、一名探偵小説を出して、一面飢ゑたる文士を救ひ、一面渴ける讀者を醫した。探偵小説は百頁から百五十頁一冊の單行本で、原稿料は十圓に十五圓、僕達はまだ容易に其恩典には浴し得なかつたのであるが、當時の小説家で大家と呼ばれた連中まで争つてこれを書いた。先生これを評して曰く、（お救ひ米）

其後に漸く景氣が立ちなほつてからも、一流の大家を除く外、殆んど衣食に窮せざるものはない有様で、近江新報其他の地方新聞の續き物を同人の腕こ

きが、先を争うて殆ど奪ひ合ひの形で書いた。否な
獨り同人ばかりでなく、先生の紹介によつて、先生
の宅に出入する幕賓連中迄兀々として筆をこの種の
田舎新聞に執つたものだ。それで報酬はどうかとい
ふと一日一回三枚半で、一月が七圓五十錢である。

そこで活字が嬉しいから、三枚半で先づ
一回などゝいふ怪しからん料簡方のものではない。一
回五六枚も書いて、まだ推敲にあらずして横に擴つ
た時もある。樂屋落ちのやうだが、横に擴がるとい
ふのは森田先生の金言で、文章は横に擴がらねばな
らぬといふことであり、紅葉先生のは上に重ならね
ばならぬといふのであつた。

其年即ち二十七年、田舎で窮してゐた頃、ふと郷
里の新聞を見た。勿論金を出して新聞を購読するや
うな餘裕はない時代であるから、新聞社の前に立つ
て、新聞を讀んで居ると、それに「冠 彌左衛門」
といふ小説が載つて居る。これは僕の書いたものゝ
うちで、始めて活版になつたものである。元來この
小説は京都の日の出新聞から巖谷小波さんの處へ小
説を書いてくれといふ注文が來てゝ、小波さんが書

く間の繫つなぎとして僕ぼくが書き送おくつたものである。例れいの五枚寸延まいすんのびといふ大安賣おほやすつり、四十回くわいばかり休みやすなしに書かいたのである。

本人ほんにん始めての活版くわつばんだし、出世しゅつせだい第一だいいちの作さくが、多少上たせうじやうの部ぶの新聞しんぶんに出でたことでもあれば、掲載けいさい濟ずみの分ぶんを、朝あさから晩ばんまで、横よこに見みたり、縦たてに見みたり、乃至ないしは襖ふすま一重ひとへとなり鄰なりのお座敷ざしきの御家族ごかぞくにも、少々せう／＼聞えよがしに朗らう讀どくなどもしたのである。ところが其後そのごになつて聞きいてみると、其小説そのせうせつが載のつてから完結くわんけつになる迄までに前後ぜんご十九通じゅうきゅうつう、「あれでは困こまる、新聞しんぶんが減へる、どうか引き下さげてくれ」といふ交渉かうせふが來きたといふことである。これは巖谷いはやさんの所ところへ言いつて來きたのであるが、先生せんせいは、泉も始はじめて書かくのにそれでは可憫かほいさうだといふ。慈悲心じひしんで黙だまつて書かかしてくだすつたのであるといふ。それが繪ゑごとそつくり田舎あなかの北國新聞ほくこくしんぶんに出でて居ゐる。即ち僕ぼくが「冠かんむり 彌左衛門やざゑもん」を書かいたのは、この前年ぜんねん（二十六年ねん）であるから、丁度ちやうど一年振ねんぶりで、二度どの勤つとめをして居ゐる譯わけである。

そこで暫しばらく立たつて讀よんで見みて居ゐると、校正かうせいの間違まちが

ひなど大分あるやうだから、旁々こゝに二度の勤めをするこの小説の由來も聞いて見たし、といつて、まだ新聞社に出入つたことがないので、一向に様子もわからず、遠慮がち臆病がちに社に入つて見ると、どこの受付でも、恐い顔のをぢさんが控へてゐるが、こゝにも紋切形のをぢさんが、何の用だ、と例の紋切形を並べる。其時僕は恐るゝ、實は今御掲載中の小説は私の書いたものでありますが、校正などに間違ひもあるし、豫て少し訂正したいと思つてゐた處もありますから、何の報酬も望む所ではありませんが、一度原稿を見せて戴く譯には行きませんか。斯う持ちかけた。實は内々これを縁に、新聞社の仕事でもないかと思はざるにしもあらずであつた。ところが其返事は意外にも、「あの小説は京都の日の出から直接に取引をしたものであれば、他に少しも關係はありません」と劍もほろゝに挨拶をされて、悄然新聞社の門を出たことがある。

されば僕の作で世の中に出た一番最初のものは「冠 彌左衛門」で、この次に探偵小説の「活人形」といふがあり、「聾の一心」といふのがある。

「聾つんぼの一心しん」は博文館の「春夏秋冬」といふ四季に
一冊さつの冬ふゆに出でた。さうして其次そのつぎに「鐘聲しやうせい夜半録やはんろく」と
なり、「義血ぎけつ侠血けふけつ」となり、「豫備兵よびへい」となり、
「夜行巡査やかうじゆんさ」となる順序じゆんじよである。(談)

【完】